

ネパール

いの うえ きょう こ
井 上 恭 子

日本におけるネパールの社会科学研究はまだ緒についたばかりである。しかし近年は、ネパールに関する文献、資料が徐々に増え、日本からの現地調査も多岐にわたってきていることから、ネパール研究の多様化と専門化がみられる。各種の情報の整理、検証、体系づけという基礎作業にも着手されており、情報の有効な利用が可能になりつつある。

ネパールについての社会科学研究で最も先行しているのは、民族学、文化人類学、社会人類学の分野である。この分野ではまず、ネワール社会を扱った石井淳論文をあげておきたい。カトマンズ盆地のネワール村落の調査にもとづくネワールの社会関係についての研究である。石井「ネワール村落におけるカースト内組織」〔2〕は、ネワール村落で父系を軸に編成された社会的集団を分析している。ネワール社会は、儀礼指向性が強く、個人の地位、役割の判定に関して社会的集団への帰属が重視される。そのような集団への参加と義務の分担をめぐる集団内、集団間の関係を、関係変化の過程に注目して検討している。石井「ネワール村落における姻戚関係と父系親族の対比」〔4〕は〔2〕の続編で、そこで扱ったカースト内社会構成の主軸である親族関係“phuki”を補いながら、対照的な性格を持つ社会関係として姻戚関係

をとりあげて、儀礼や労働のやりとりから“phuki”との対比を試みている。石井「ネワール村落における家族」〔3〕は既発表論文（1974、75年、『アジア経済』第19巻第1・2号 1978年2月参照）に続くものである。ネワール村落における家族の構造と変化をカースト、土地保有関係などをもとに分類、検討し、家族構造の変化が単純な核家族化への動きではなく伝統的な理想形態への指向を内包していると指摘している。石井「ネワール村落における guthi」〔5〕はネワール村落の儀礼組織“guthi”の分析である。“guthi”は儀礼組織と土地保有形態の二つを複合した意味を持つが、〔5〕は儀礼組織に重点を置いて論じている。石井「ネワール村落の社会関係の性格と社会変化」〔6〕は一連のネワール村落研究論文の終章にあたる。ここではまずネワール社会の儀礼強調の傾向を検討し、次にネワール社会関係を、非市場的性格を持つカースト・システムにおける配分（「層序的配分」という点に注目して交換理論の観点から分析している。一つの結論として、交換原理の浸透はカースト・システム衰退の要因となり、カースト間の相互依存関係が弱化したカーストの「個別化」の現象が現われるとしている。新しい切り口のカースト・システム変化論である。以上の石井論文〔2〕～〔6〕はいずれも、緻密な

データ検証、整理で、説得力のある論文となっている。なお、石井論文は『ネパール村落の社会構造と其の変化』〔7〕にまとめて収録されている。石井「ネパール村落における近年の経済変化」〔8〕は上述の論文で扱ったネパール村落の2時点(1970年, 78年)の比較分析である。経済的側面に重点が置かれ、変化した面として、農業経営規模の零細化、兼業化の進行、村外からの労働者の流入、職業の多様化、村内共同性の低下があげられ、全体的に村外の世界とのつながりが多面化、緊密化したことが指摘されている。

ネパールの民族の研究としては飯島茂『ヒマラヤの彼方から』〔1〕がある。タカリー族をとりあげることにより、19世紀以降国際環境激変のなかで交易ルートを狭められ、生業形態の変更を余儀なくされた山岳民族の姿を描き出している。

西澤憲一郎『ネパールの歴史』〔12〕は初の体系的なネパール現代史といえよう。西澤はまず、ネパールの現状を規定している与件として、王制を頂点とする伝統的政治・社会秩序と、インドとの関係の2点をあげ、そのうち対インド関係を中心に本書をまとめている。扱っている期間は18世紀末から1980年前後であるが、政府間の交渉や政治的関係の展開を克明に分析し、経済的にも政治的にもインドと不可分の存在であるネパールの状況を浮き彫りにしている。

構造的にインドに従属せざるをえないネパールを、ネパールの経済開発の過程を分析することによって論証しているものとして井上恭子「ネパールの経済開発計画」〔9〕がある。これは公的資料に依拠した分析であるため、ネパールの経済で大きな役割を占める未捕捉の私的経済部門の分析に及んでいないという欠点がある。ネパール経済の研究には、政府系のマクロ的資料の利用だけでな

く、地域で細かく異なる経済活動、私的経済活動の実態を把握する必要があるが、資料の乏しさが研究上の隘路となっている。この点で鹿野勝彦「村落の経済変化と国境」〔10〕が示す研究視点は今後のネパール研究が必要としているものであろう。〔10〕は、ネパール東部、インド西ベンガル州ダージリン県と接する国境の一部で両側の村落地域を対象に、経済生活に重点を置いて国境両側の地域の特徴、相違を調査し検討している。人口の動態、さまざまな形の移動、村落経済の基盤としての生業形態自体の変化、社会集団相互間の関係などを歴史的、構造的、制度的な面から検討しており、多くの示唆を含んだ論文である。ネパールとインドとの国境がオープン・ボーダー(開放国境)となっているため人と物と資金の移動が自由であることは、ネパールの政治、社会、経済に大きな影響を与えている。今後、この分野での研究がさらに進み、ネパール研究の視野がさらに広がることが望まれる。

日本で出されたネパール関係文献目録としては、神原達編『ネパール文献目録』(1959年)、『日本ネパール協会蔵ネパール国内出版資料目録』(1973年)があるが、いずれも外国語資料の文献目録である。1984年に初の日本語および日本で出された文献目録として日本ネパール協会編『ネパール研究ガイド』〔13〕が出版された。総記に続き、歴史、政治・外交・法制、経済・産業、民族・文化、医療・衛生、自然、探険・紀行・トレッキング、登山、児童書と分けられた詳細な文献目録である。鈴木よ志子「南アジア関係邦文文献目録 1974-1984」〔11〕のネパールの項は、社会科学関係文献を扱っている。

〔11〕、〔13〕から、日本におけるネパール研究が、社会科学とくに政治学、経済学の分野で立ち

遅れていることがわかる。このことは、外国のネパール研究にも共通していることであるが、この立ち遅れに取り組むことが今後の一つの課題である。

〔文献リスト〕

- [1] 飯島茂『ヒマラヤの彼方から——ネパールの商業民族タカリー生活誌——』日本放送出版協会 1982年。
- [2] 石井溥「ネワール村落におけるカースト内組織——phukiとsanā guṭhi——」(『民族学研究』第40巻第4号 1976年3月)。
- [3] 石井溥「ネワール村落における家族——ネワール村落調査報告 3——」(『アジアアフリカ言語文化研究』第12号 1976年)。
- [4] 石井溥「ネワール村落における姻戚関係と父系親族の対比」(『民族学研究』第42巻第1号 1977年6月)。
- [5] 石井溥「ネワール村落における guṭhi」(『アジアアフリカ言語文化研究』第13号 1977年)。
- [6] 石井溥「ネワール村落の社会関係の性格と社会変化」(『アジアアフリカ言語文化研究』第14号 1977年)。
- [7] 石井溥『ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——』アジア・アフリカ言語文化研究所 1980年。
- [8] 石井溥「ネワール村落における近年の経済変化——ネワール村落追跡調査報告——」(『アジアアフリカ言語文化研究』第20号 1980年)。
- [9] 井上恭子「ネパールの経済開発計画」(『アジアトレンド』第24号 1983年秋)。
- [10] 鹿野勝彦「村落の経済変化と国境——インド、ネパール国境のケース・スタディ——」(『民族学研究』第45巻第1号 1980年6月)。
- [11] 鈴木よ志子「南アジア関係邦文献目録 1974-1984」(『アジア経済資料月報』第28巻第2号 1986年2月)。
- [12] 西澤憲一郎『ネパールの歴史——対インド関係を中心に——』勁草書房 1985年。
- [13] 日本ネパール協会編『ネパール研究ガイド』日外アソシエーツ 1984年。

(アジア経済研究所動向分析部研究主任)